令和２年８月 25 日

第８回定例会
議事録

文京区教育委員会

文京区教育委員会議事録

第　6　号

令和　２年　第８回 定例会

日時：令和２年８月 25 日（火）午後２時

場所：庁　議　室

「出　席」	教　育　長	加　藤　裕　一
	教育長職務代理者	清　水　俊　明
	委　　員	田　嶋　幸　三
	委　　員	坪　井　節　子
	委　　員	小　川　賀　代
「説明のために出席した教育局職員」	教育推進部長	山　﨑　克　己
	教育総務課長	松　永　直　樹
	教育指導課長	松　原　　修
「書　記」	庶務係長	伏　屋　明　子
	庶務係主事	高　橋　　翔

令和２年

第８回教育委員会定例会

令和２年８月 25 日（火）午後２時
場　　所　　スカイホール
議事録署名人　　田嶋幸三委員

第１　議事録の承認

議事録第４号（令和２年第６回定例会）

第２　議案の審議

第４８号議案　令和３年度使用中学校教科用図書採択について

第４９号議案　令和３年度使用特別支援学級教科用図書採択について

第３　その他の事項

「開　会」

（14:00）

○加藤教育長　定刻になりましたので、第８回文京区教育委員会定例会を始めさせていただきます。

初めに、新型コロナウイルスの対策として三密を避けるために、会場をこのスカイホールに変更しております。各テーブルの真ん中にマイクがありますので、発言の際にはご使用ください。

次に、本日の傍聴定員についてご案内いたします。本日の議案、教科用図書の採択は毎回多くの方が傍聴を希望されており。通常の定員 15 名を超過することが見込まれましたので、文京区教育委員会傍聴人規則第３条に基づきまして、定員を 35 名とさせていただきます。ご理解のほどをよろしくお願いいたします。

続きまして、出席状況を確認させていただきます。委員は全員出席していただいております。理事者は教育推進部長、教育総務課長、教育指導課長が出席しております。

本日の議事録署名人は、田嶋委員にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（はい）

第１　議事録の承認

議事録第４号（令和２年第６回定例会）

○加藤教育長　それでは、議事日程に入らせていただきます。

第１「議事録の承認」です。議事録第４号がお手元にあるかと思います。事前に確認していただいているところですが、なお修正がありましたら、この会が終了するまでにお申し出いただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

第２　議案の審議

第４８号議案　令和３年度使用中学校教科用図書採択について

○加藤教育長　それでは、議案の審議に移らせていただきます。本日は２件です。

１件目、「第 48 号議案令和３年度使用中学校教科用図書採択について」。ご説明をお願いいたします。

○教育推進部長　第 48 号議案、令和３年度使用中学校教科用図書採択について、提案理由をご説明いたします。

本案は、文京区立学校教科用図書採択実施要綱に基づきまして、令和３年度から使用する区立中

学校教科用図書を採択するものです。

議案資料は、文京区立学校教科用図書の採択を公正かつ適正に行うために、教育委員会のもとに設置いたしました令和３年度使用中学校教科用図書審議会の答申でございます。この答申は、文京区立学校教科用図書採択実施要綱及び同実施細目で定めました採択方針に基づきまして、教科用図書を調査・研究の上審議し、その特徴を明らかにしたものでございます。

今回、採択をしていただきます教科用図書は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語、特別の教科道徳の 10 教科 16 種でございます。これまで、５月に送付された教科書見本について、各委員が実際に手にとってご覧いただき、それぞれ比較検討されているとともに、事前にお渡しした本日の議案資料である教科用図書審議会答申に加え、教科用図書調査研究委員会の基礎資料、教科書展示会における区民意見等についても、お目通しいただいております。

それらを踏まえ、文京区の中学校で学ぶ生徒にとって最適の教科用図書をご審議の上、ご決定いただきますようよろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

○加藤教育長　それでは、議案の審議に入らせていただきますが、審議に当たりまして、議事の進行について、お諮りしたいと思います。

先ほどご説明がありましたけれども、これまで各委員の皆様におかれましては、審議会の答申をお読みいただいております。また、全ての発行者の教科書を実際に手にとって確かめていただいているほか、教科書展示会等においていただいたご意見についても、目を通していただいているところでございます。

そこで、本日は、実際に教科書をご覧になられた各委員の皆様からご意見をいただき、その上で私が取りまとめを行い、お諮りしたいと思います。

この進め方は従来と同様でございますが、今回もそのような進め方でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○加藤教育長　それでは、そのように進めさせていただきます。

本日、各委員のお手元に審議会の答申がございます。既にお読みいただいているところですが、初めに、事務局から教科ごとに概要の説明を受け、各委員からご発言をいただくという形で進めさせていただきたいと思います。

それでは、まず、事務局のほうから説明をお願いいたします。

○教育指導課長　それでは、まずお手元にあります答申に若干触れさせていただきたいと思います。

答申につきましては、前段のところには、教科等の目標、それを踏まえた指導の重点などについて触れられております。これは新しい学習指導要領に沿った内容でございます。その下に各発行者の特徴をまとめてございます。私からは、教科ごとに審議会の中で話題になった点について簡単に触れさせていただければと思います。

国語から、よろしいでしょうか。新しい学習指導要領では、語彙指導や情報の扱い方に関する指導の改善・充実、学習過程の明確化などが言われております。

審議会では、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の育成に関する内容や巻末資料の扱いなどについてご意見をいただいたところです。

以上となります。

○加藤教育長　それでは、各委員からご意見をいただきたいと思います。

○清水委員　幾つか候補となる教科書があるかと思いますが、私が読ませていただいて、光村図書が一番適しているのではないかなと思いました。その理由といたしましては、１年生の最初に、音読するとき、あるいは発表するとき、発表を聞くとき、こういった基本を取り上げていますので、小学校での学習事項を確認・発展させる指導がしやすいのではないか。こういったところがよく整理されている。この辺は他社と比べてもいいのではないかと思いましたので、光村図書ということにいたしました。

○坪井委員　私は教育出版の教科書が適切ではないかと思いました。１つは、教育出版のそれぞれの単元ごとに学びナビ、本文でみちしるべという形で、そこで何を学ぶかということをシンプルに子どもたちにわかる構成になっていること。それから、取り上げられている題材が、私にとっては一番関心があったことです。国語ということではあるんだけれども、現代、今、ここで子どもたちが用いる言語として、現在の問題にどう使うかというところがとても大事だと思っています。その意味で、例えば１年生では、子どもの権利条約についての項があり、あるいはＳＤＧｓ、世界遺産、２年生ではＳＮＳから自由になるためにとか、またＳＤＧｓももちろんありますし、３年生になるとメディアリテラシー、ＡＩと哲学というような現代の状況、今の問題に近いことをきちんと専門の方たちがお書きになっていらっしゃる。そういう題材が含まれていまして、ほかの教科書とはちょっと異なる視点だったなと思うので、教育出版を上げたいと思います。

○田嶋委員　どの教科書も教育指導要領の項目をしっかりと入れて書いてくださっていると思います。その中で、光村図書は、例年読み応えのある文章、文学・小説等を多く使っていたりすると思ってたんですが、今回、言語技術、コミュニケーション能力やプレゼンテーション、そして、相手

をどう納得させるかというところにかなり重きを置いて大きくかじを切られたなと思います。

これが今までの国語力を上げるかどうかについていろんな意見はあると思いますが、言語技術というものに大きくかじをとられた内容というのを非常に評価し、私も光村図書を１番に上げます。

○小川委員　新しい学習指導要領にのっとって大きな変化がある教科書になったなと感じております。どの教科書も必ず教科書の最初のところに、学習の進め方について提示がされています。その中でも、光村図書が学習の窓という形で、かなり明確に、この単元ではこういうことを勉強していきましょうということが、どの教科書でもされてはいますが、学びのポイントが十分に示されているというふうに感じました。今はまだコロナの感染状況がどういうふうに広がるかということも不安定な時期でもありますので、自学・自習がふえるということも十分に考えられる点におきましても、丁寧な指導が入っているということで光村図書がいいのではないかと思いました。

○加藤教育長　それでは、私のほうからもお話ししたいと思います。

まず、国語の教科ですが、全ての学習の基礎になる大事な教科だと思っております。ただ、そういう教科にもかかわらずＰＩＳＡの調査の結果では、日本では読解力に課題があるという現状もあります。また、次の学習指導要領の中でも、基礎・基本の知識を重視した上で思考力・判断力・表現力を育むことが大事だとされております。単に知識を習得するだけではなくて、その知識を活用して現在ある問題をどう解決するか、言語を通して課題をどう解決していく力をつけていくかというところが国語にとって大事なことかと思っております。

そういう点から見ると、私は東京書籍と光村図書がいいのかなと思っております。東京書籍は特に説明的な文章とか読解に必要なことが教材として多く扱われていると思います。光村図書のほうも、課題解決型の構成が見られます。先ほどもお話ございましたけれども、言語の技術とか、学習の進め方、そういったところにも工夫が見られました。特に文京区の場合、コミュニケーション能力に課題があるという結果が出ております。そういった意味からも、話すとか聞くの領域の基礎スキルが示されているという意味では、東京書籍と光村図書、両方の中で、さらに光村図書のほうがいいのかなと感じました。

取りまとめさせていただきますと、教育出版と東京書籍、光村図書ということでお話をいただきました。より多くの方が、光村図書がいいというお話をいただいておりますので、国語につきましては、光村図書で決めさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。――それでは、国語は光村図書ということで決定とさせていただきます。

続きまして、国語の書写に入りたいと思います。事務局のほうから説明をお願いします。

○教育指導課長　書写でございます。審議会では、書写の学習したことを日常生活や他の教科に生かす指導、また限られた指導時間の中で生徒に興味を持たせたり、手軽に書いて練習できるような工夫について意見が出されておりました。

以上でございます。

○加藤教育長　それでは、ご意見のある方、お願いします。

○清水委員　特に国語の教科書と書写を合わせる必要はないとは思うんですが、内容的なものとして、例えば手紙を書く際の留意事項など詳しく書いてありますので、日常生活につなげることができるというところですぐれているのではないかなと１つ思いました。

あと、ユニバーサルデザインの書体についてのコラムがありますので、見る人に配慮するということについて触れているというところからも、光村図書がよろしいのではないかと思いました。

○小川委員　私も、光村図書がいいんじゃないかなと思いました。目標の中にも、文字の文化の理解を深めるということが含まれていますし、先ほど清水委員もおっしゃっていましたが、ユニバーサル書体が取り上げたり、書体をデザインするような話も組み込まれていたり、より広く文字を効果的に書く力を育むことができるのではないかなと思いまして、光村図書がいいのではないかと思っております。

○加藤教育長　ほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

私のほうも、ほかの会社さまざまな工夫をされていますけれども、そちらと比較して光村図書がいいのかなと感じました。特に手紙を書く際の留意事項がかなり丁寧に示されていて、手紙を書く機会がなかなかないので、こういったところで学習することは、よい機会につながるのかなと思いました。

ほかにご意見ないようであれば、光村図書でよろしいでしょうか。

それでは、そのように決定させていただきます。

続きまして、社会（地理的分野）をお願いいたします。

○教育指導課長　地理的分野でございます。新しい学習指導要領では、地域の学習における防災学習の重視が言われており、審議会でも、防災に関する対応について話題になっておりました。

また、表やグラフの見やすさなどについてもご意見をいただいたところでございます。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○田嶋委員　私は帝国書院が一番よいと思いました。やはり見やすいイコールわかりやすいだと僕

は思っています。そういう意味では、地図等、いろんなこれまでの歴史もあるのかもしれませんが、帝国書院が非常に見みやすいという印象を受け、その他大きな差があるとは思えませんでしたので、帝国書院を勧めて、１番にしたいと思います。

○清水委員　今、田嶋委員が言ったこととほぼ同じなんですが、それに加えて、防災に関する内容で、鎌倉が、中学校３年生の校外学習であり、ハザードマップを取り上げているという点からも、帝国書院がよろしいんじゃないかなと思いました。

○加藤教育長　ほか、いかがでしょうか。

私のほうから。地理の分野でどういうところが大事かなと考えました。今、社会の中では、持続可能な社会をつくっていこうということが大きな命題とされています。その中で、地球規模の課題とか地域の課題を解決していく、そういった態度がやはり求められるのかなと思っております。では、そういった力をつけるためにどういった教科書がいいのかなということで考えさせていただきました。

例えば、地域の多様性にかかわる基礎的な知識を身につけた上で、環境問題とかそういった具体的な問題にフォーカスして、その内容を一層深掘りしているような教材がいいのかなと思っております。また、地域特性がいろいろあるので、そういったところも踏まえて指導ができるような教科書がいいかなと思いました。

各社いろいろ工夫しているんですが、そういった観点から見たときに、私は帝国書院と東京書籍が学びやすいのかなと、全体を捉えたときに感じました。

東京書籍と帝国書院の中身を具体的に見ますと、先ほど言ったような視点は、両社とも書かれていますが、その中で東京書籍はページの下のほうに、「チェック・トライ」という項目がありまして、その中で主体的な学習、探究的な学習に取り組ませることができるような工夫がされているのかなと感じました。

一方、帝国書院のほうは、同じように、「確認しよう・説明しよう」という項目があり、こちらは客観的な事実を捉えてそこから考察するような設問がされているなと思いました。加えて、帝国書院のほうは、巻末の振り返りのページを見ますと、より詳細に具体的な学習方法まで示されているのかなというところが見てとれました。

そういったところを考えますと、２社のうちでは帝国書院がさらにいいのかなという感想を持ちました。

ほかの委員はよろしいでしょうか。よろしければ、２人の委員と私が帝国書院がいいということ

で帝国書院ということで決めさせていただきます。

続きまして、歴史になります。説明をお願いいたします。

○教育指導課長　歴史的分野でございます。審議会では、問題解決的な学習を進める上で教科書の構成がどのように工夫されているかということや、生徒にとっての見やすさ、教員の指導のしやすさなどについてご意見をいただいたところです。

以上でございます。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○坪井委員　私は、帝国書院と教育出版の２社を上げたいと思っています。帝国書院の教科書が、中では一番よかったと私は思っています。

私がよかったなと思うのは、視点の捉え方が現代の問題になっているところから、あるいは現代問題になってきたところから、国際的な視野を含めてきちんと扱われている。例えば沖縄・琉球問題、領土問題とか、そうした部分について非常にしっかり書かれているということ。深掘りのテーマという形で、見開きで、さらに突っ込んだ資料集のような部分がありました。そこの内容も大変充実していて、子どもたちもぜひ読んでほしいという内容が書かれていたと思っています。

さらに、教育出版も帝国書院も、日本史と世界史を俯瞰するという視点がありました。両方、日本で何が起きている、世界で何が起きているということを俯瞰しながら勉強できるというページを章ごとにつくっていました。これもぜひ子どもさんたちに、そこを見ながら学んでほしいと思った次第です。

という意味で、中身としては帝国書院を推したいと思います。

○田嶋委員　私も帝国書院が一番わかりやすく、読みやすかったです。今、坪井委員がおっしゃられた今問題になっている領土や歴史的なところの記述がフェアで客観的であるというふうに私は感じました。そういう意味では、東京書籍は、文京区の例を出して書かれているということには物すごく大きなポイントをあげられるんじゃないかと僕は思って、最後まで迷っていましたが、内容等を考えると、坪井委員と一緒で帝国書院を１番にしました。

○小川委員　私も、教科書の構成のあり方として、帝国書院と教育出版がわかりやすいと思いました。先ほど坪井委員も触れられていましたが、中学生になって初めて世界史を勉強することになりますので、そのときに日本の歴史と世界の歴史を同時に追っていくということはやはりとても大事な視点かなと思っております。両社とも、この両方をわかりやすい形で見やすくまとめているというのがよかったなと思っています。

坪井委員のほうも、帝国書院の深掘りのところのページを評価されていましたが、私も、タイムトラベルという、章の間、間にイラストがあって、現代と過去のようなものの絵が並べられていたり、歴史を勉強していく上での身近さみたいなものも、こういったところから感じられるのかなと思いまして、両方いいと思っていますが、どちらかといったときに帝国書院のほうが子どもたちにとって見やすい構成になっているかなという印象を受けています。

○清水委員　３人の委員の方が、帝国書院が１番で、東京書籍２番ということで、私も、内容であるとか、教えやすさ、学びやすさ、学習効果、この辺のところを比べると、この２つに差はないのかなと。１つ、さっき田嶋委員がおっしゃったように、文京区の歴史を扱っていることは、中学校の生徒たちにとって非常にわくわくするようなところなのかなと感じたので、私の場合は、この２つのうち東京書籍を１番にしたいと思います。

○加藤教育長　私のほうから。各社すごく使いやすいようにいろんな工夫がされているなというのは見てとれました。ただ、中身を細かく見ると、やはり視点とか扱っているボリュームに濃淡があるなと感じました。生徒が授業でそれを聞いて、どういうふうに受けとめるかなと考えたときに、先ほど田嶋委員のほうから、客観的という話がありましたけれども、帝国書院がそういった部分では一番バランスがとれた表現になっているのかなと思いました。

次の学習指導要領では、思考力・判断力・表現力を育むことが重要とされております。帝国書院で章の学習を振り返ろうというページがありますが、そこではそういった新しい学習指導要領に沿ったような記載になっているのかなと感じました。

そうしますと、帝国書院が一番多い。次が教育出版と東京書籍ということで、東京書籍は文京区のことが出ているというところは魅力がありますけれども、全員の方のほぼ総意で帝国書院ということでよろしいでしょうか。――ありがとうございます。

公民の分野、お願いします。

○教育指導課長　公民的分野でございます。審議会では、今日的なところで経済の仕組みであるとか領土問題、選挙権について、また、ＳＤＧｓとの関連など、記述量であるとか、中学生にとってのわかりやすさについて、ご意見をいただいたところでございます。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○田嶋委員　今多くの企業の方たちとお話ししている中では、ＳＤＧｓというのは、日本だけではなく世界中の企業のこれからの非常に大きなターゲットになっていく分野だと思います。それに対

して教育出版の教科書が真っ先にこのＳＤＧｓを載せ、それをもとに領土権やいろんなものに移っていく、そういうストーリーを僕は一番評価できたので、教育出版を１番にしたいと思います。

○坪井委員　私も教育出版を１番に推したいと思いました。今おっしゃられたＳＤＧｓの視点で全てが貫かれているということはとても大切なことです。取り上げられているテーマが、やはり現代的に必要な課題をきちっと捉えていて、私の視点から言いますと、子どもの権利条約についてもきちんと新しい条約として出しています。

それから、メディアリテラシー、ＳＮＳ、そうしたところで、子どもたちに対してのクリティカルシンキングの問題とかマスコミの評価、ニュースをどうするかということについてのテーマがきちんと書かれていました。

例えば、国際社会の課題ということで、ＳＤＧｓの関係なんですが、子どもと女性、宗教、食料・水、格差ということがそれぞれテーマごとにページを割いて現代の国際社会の問題として提起をされていました。それが私たちの課題だという捉え方をしていた。

領土問題の解決に向けてというところの締めくくりに関しましても、今の領土問題に関して日本政府の立場はこういうことですと。それに対して、暴力を用いずに平和的に解決するということが求められているということもきちんと書かれていて、公民の教科書としては安心して子どもたちに使ってもらえると思いました。

○小川委員　皆さんと同じなので、あえて言わなくてもいいかなと思ったりもしましたが、私も教育出版がやはりいいかなと思いました。先生方がおっしゃっていたように、ＳＤＧｓに巻頭で触れて、そこから話を展開していくという構成もいいと思いました。あと、18 歳投票権とか、新しい人権のことなどもかなり丁寧に取り扱っているという点がよろしいのではないかと思って教育出版がいいと思っています。

○清水委員　私も同じです。ＳＤＧｓ、巻頭で触れているだけじゃなくて、章末でも扱っているということ。18 歳選挙権を小単元で扱っていたり、平等権や新しい人権、こういったものも丁寧に解説しているということもございますので､教育出版ということでよろしいんじゃないかと思います。

○加藤教育長　私のほうも、読んだ感じは同じような感想を持ちました。今日的な課題にフォーカスを当てて、丁寧に書いているなというのが教育出版さんの教科書から見てとれました。

また、中身的にも、学習の初めにとか、読んで深く考えよう、学習のまとめと表現という形で学習を段階的に進める中で、進め方についても丁寧にページをつくっているなというふうに感じました。

教育出版ということで、全員一致でよろしいでしょうか。――では、そのようにさせていただきます。

続きまして、地図、お願いいたします。

○教育指導課長　地図でございます。審議会では、色使い等による見やすさ、土地の高低のあらわし方として立体感、地図以外の統計資料の取り扱いなどについて、ご意見をいただいております。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○清水委員　地図は見やすさが大切だと思いますので、見やすさ、扱いやすさ、さらに実績もある会社ですので、帝国書院の地図がよろしいのではないかなと思います。

○小川委員　私も、東京書籍と帝国書院の両方を拝見させていただきました。両方とも、昔の地図と違っていろんな情報が含まれていて、甲乙つけがたいなと思ったんですけれども、やっぱり見やすさという意味では、色味なんかが明るく発色されているような感じで、見やすいなという印象を受けましたので、帝国書院でよろしいのではないかと思います。

○加藤教育長　ほかはいかがでしょうか。よろしいですか。

私も、地図は見やすさが一番大事かなと思っております。両方ともいろいろ工夫されていますが、２社比較すると、グラフや表の発色とか、地図自体の見やすさという部分では、若干帝国書院のほうが見やすいのかなと感じました。皆さんもそういったような感想だと思いますので、帝国書院ということでよろしいでしょうか。

続きまして、数学、お願いいたします。

○教育指導課長　数学でございますけれども、教員が問題解決的な学習や協働的な学習をやろうとしたときに、教科書をどのように活用できるかといった視点であるとか、取り扱っている問題の量や質について、ご意見をいただいたところでございます。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○小川委員　とてもいろいろな工夫がされていて、どの教科書もすばらしいと思ったんですけれども、私としては、東京書籍と学校図書がとても印象に残りました。

いずれも、式の導きが丁寧だったり、ポイントの見せ方の工夫が施されたりしていて、とても理解しやすい構成になっていると感じました。

特にこの２社がいいかなと思ったのは、演習問題では、基礎、応用、活用と３段階に問題が分か

れていて、問題の量も豊富にありますので、授業内や授業外で活用することも十分対応できる教科書だなと思いまして、この２社を推薦したいと思います。

○坪井委員　私も、安定した教科書という印象なんですけれども、東京書籍と学校図書。恐らく先生方も教えるのにとても使い使いやすいし、子どもたちも理解しやすいと思いました。

学校図書については、章ごとに、基本問題、応用問題、活用問題と問題を 10 個、同じところに書いてあります。子どもたちもその順に勉強できるようになっているので、こういうやり方というのはとてもわかりやすいんじゃないか、子どもは使いやすいんじゃないかなと思いましたが、どちらも甲乙つけがたいと思いました。

○清水委員　キーワードはやはり問題解決的な学習ということになると思いますが、私は、東京書籍のほうは、基本が次の学びへとつながるような系統性であるとか、連続性のある単元構成になっているというところで、やはり東京書籍ではないかなと思いました。

○田嶋委員　お２人と一緒で東京書籍を１番にしました。理由も同じなんですけど、特にデータ分析とかそういうものが、今までの我々の時代の教科書とは全く違う、相手を非常に納得させ、自分も納得できる、そういうものを数学を通して考えているんだということが明確にわかりました。どの教科書も、身近な問題に触れながら工夫していらっしゃるというのがわかりましたが、東京書籍を１番にしたいと思います。

○加藤教育長　私のほうから。まず、どういった教科書を選ぼうかなと考えたときに、生徒が数学に対して興味を持てるような教科書を選びたいなと思いました。生徒の興味につなげるためには、生活の場面から数学に上手につなげている教科書がいいのかなと思いました。また、そういった生活の場面から数学につなげているということで、問題解決型の学習にもつながるのかなと考えました。

そういった視点で各社を見させていただきました。結論から言いますと、私も東京書籍がいいのかなと感じました。その理由は、まず、各章を見ると、導入部分のページが見開きじゃないページになっている。そのタイトルも問いかけの文章になっているということで、どんな学習をこれから行うのかという意識づけの工夫がされているのかなと思いました。その後、順を追って考えさせる構成になっていまして、数学が苦手な生徒にとっても問題場面を理解しやすいつくりになっている、順を追って理解するような構成になっているのかなと思いました。

最終的には、その課題を解決する方法として数式を使うという流れになっておりますので、日常の場面から、丁寧に段階を踏んで数学につなげる工夫が見られるということで、数学が苦手な生徒

にも学習しやすい構成になっているのかなと思いました。各社、工夫があるんですが、一連の流れという部分では、東京書籍の工夫が一番際立っているかなと見てとれました。

では、東京書籍ということでよろしいでしょうか。

続きまして、理科、お願いいたします。

○教育指導課長　理科に入ります。審議会では、問題解決的な学習の流れを教科書でどのように示しているかという点が話題となりました。また、実験を行う際の手順であるとか、安全面への配慮、扱いやすさであるとか、先ほども出ておりましたが、ＳＤＧｓとの関連などについて、多数ご意見をいただいたところでございます。

以上であります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○小川委員　どれも興味深く拝見させていただきました。特に実験を中心に深く読ませていただきました。その中で表現の仕方とか深掘りの仕方という意味で、東京書籍と啓林館がいいなと思いました。

東京書籍のほうは、教科書の形が縦長になって、新しいサイズで、大変扱いやすいなという印象を持っております。実験の写真もきれいで、写真の使い方も、いきなり答えを見せるのではなくて、イラストとかで隠しておいて「どうなると思いますか」という形で思考を促していくような過程もあって、いいなと感じております。

啓林館のほうは、内容は圧倒的にこちらのほうが充実しているなという印象はあります。１つの実験の中でも、実験の項目数とか、内容もかなり踏み込んだところまであって、他社と比べて一歩踏み込んでいるという印象がありまして、文京区の生徒たちにこっちのほうが合っているのかなということもちょっと感じています。実験についても、イラストや写真などで、経過が丁寧に示されているので、全部の実験ができれば一番すばらしいんですが、時間数の関係で全部の実験ができなかった場合でも、このぐらい丁寧に書かれているのであれば、実験をしたときに得られる情報がある程度体感できるのではないかなと思っております。構成としても、探究実習とか探究実験ということがあって、考えるスパイラルになっていて、とてもよいなと思いました。

２社、どっちでもいいかなと思っていますが、どちらかといった場合は、啓林館のほうがいいかなと思っております。

○坪井委員　今、小川委員がおっしゃったこととほとんど同じなんですが、私も、啓林館の教科書がとてもいいなと思いました。写真の使い方とか実験の展開の仕方、とてもわかりやすい。子ども

さんたちの興味を引く内容になっている。鮮明ですし、わかりやすいというのがまずありました。

すごくおもしろいなと思ったのは、探Ｑ実験というところで、通常の実験からさらに進んで、多分授業ではそこまではできないだろうけれども、仮説を立ててそれを実験してという流れがいつも出てくる。科学というものに対しての子どもたちの受けとめ方、こういう形で仮説を立てて実験していくんだなというのがすごくよくわかる。私が、気がついたのは、マグマのねばりけという実験、風船のようなところにどろどろのを入れてやるという実験なんですが、実際には教室ではできないにしても、こういう形で実験をすることができるんだということを子どもたちに教える。そこまで探Ｑしていく。それがおもしろく書かれていて、理科嫌いが言われているときに、子どもたちにとても関心・興味を持ってもらえるんじゃないかなと思いました。

○清水委員　今２人の委員がおっしゃったとおりで、理科は実習とか実験が非常に大切なところだと思います。その点でやはり啓林館が充実しているということ。探究的な学習がいかに展開できるかというところ、それに関してもこの教科書がすぐれているのではないかなと思いました。

○加藤教育長　ほかはよろしいでしょうか。

私も、結論から言うと啓林館がいいのかなと思いました。啓林館の教科書を見ると、まず最初にこれまで学んだことの確認から始まっています。小学校であったり、中学校でもその前に学んだことから始まって話し合いや実験を通して段階的に思考を深めていけるという流れになっています。

先ほど探Ｑというお話がありましたが、図でも探Ｑの過程をスパイラルに描いていて、思考をどう深めていくかというところもイメージできるのかなと思いました。

あと、日常生活とか社会的なトピックスも取り上げていて、それに対する科学的な見方を紹介するような場面もありますので、理科離れと言われていますが、生徒が理科に対して興味を持ち、身近に感じてもらえるような工夫がされているのかなと思いました。

それでは、理科については啓林館ということでよろしいでしょうか。

続きまして、音楽（一般）、お願いします。

○教育指導課長　音楽（一般）でございます。中学生になると、音楽に苦手意識のある子どもが出てくるということで、音楽に対する興味・関心を引き出す工夫であるとか、音楽を通しての社会とのつながりをどのように教科書の中にあらわしていくかというところが話題になりました。

また、少し具体的なところでは、指揮の解説や、音符・用語等の取り上げ方についても、ご意見をいただいたところです。

以上になります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○坪井委員　今もお話がありましたけれども、教育芸術社の中で指揮の仕方についてのページがとてもおもしろくて、私も学んでしまったんです。こういうことを皆さんが中学校のころから学ばれたらいいなと思いました。

それよりも、私はまず、口絵の写真で、学年によってですが、谷川俊太郎さん、松任谷由実さん、野村萬斎さん、マリア・カラスが出てくる。皆さんがよく知っている、音楽を実際にやっている人たち、谷川俊太郎は違うでしょうけれども、そういう人たちが出てくる。音楽というものが自分たちの生活の中の身近にあるなということを感じつつ音楽に入っていけるということが教育芸術社はいいなと思いました。

さらに、数を数えたわけでもないんですが、曲のバラエティー、いろんな曲が入っていて、巻末にもいろんな曲があるのがいいなと。教育芸術社の音楽で取り上げられていた曲数がバラエティーに富んでいたと思った次第ですので、教育芸術社の教科書を推したいと思います。

○小川委員　私も教育芸術社がいいかなと思っております。伝統芸能のところが、野村萬斎さんが取り上げられているぐらいなので、大変詳しく紹介されていたり、諸民族の音楽も、地図と一緒に地方のものもかなりわかりやすくまとまっていたりしている。

冒頭で説明がありましたけれども、中学生ぐらいになってくると音楽が少し恥ずかしい科目の１つに入ってくるのをなるべく親しくなるようにということで、日本のポピュラー音楽もかなり詳しく、発表みたいな形でいろいろ展開されていたりしていて、そんな中にも時代の変遷があるんだよ、音楽の歴史の移り変わりみたいなことも詳しく教えてくれるようなページがあるという点がなじみやすいんじゃないかなと思いました。

あと、ここでもＳＤＧｓとの関連に触れている。たくさんではないですが、ちょっとあって、音楽からもそういったものにかかわる視点が持てる意味でもいいのかなと思って、推薦したいと思います。

○清水委員　今お２人の委員が言ったことで、私、それ以上言うこともないんですが、１つだけ。５種類の和楽器というのが出ている。琴、三味線、太鼓、篠笛、尺八、これについて非常にバランスよく取り上げているというところから、教育芸術社がよろしいんではないかと思いました。

○加藤教育長　今のは、音楽の楽器のほうの話ですか。

○清水委員　そうです。

○加藤教育長　それでは、次の音楽・楽器のときにそういうご意見があったということでよろしい

でしょうか。

私のほうでも見させていただきまして、先ほど坪井委員のほうからお話がありましたが、楽曲数が、２社を比べると教育芸術社のほうがかなり多いんですね。音楽の楽しさとか生涯にわたって音楽に親しむという部分ではいろいろな楽曲に触れるのは１つ大事なところかなと考えています。私のほうも教育芸術社がいいのかなと感じました。

皆さんもそういうようなご意見だと思いますので、教育芸術社ということで、音楽（一般）については決めさせていただきます。

続きまして、音楽の器楽のほうをお願いします。

○教育指導課長　器楽合奏でございます。やはり音楽が得意ではない生徒への配慮、また和楽器の扱いなどについて、審議会のほうでは話題になったというところでございます。

以上です。

○加藤教育長　清水委員のほうは、先ほどの。

○清水委員　そうです。先ほどフライングしましたけれども、５種類の和楽器がバランスよくということで、よろしくお願いします。教育芸術社ということです。

○加藤教育長　ほか、いかがでしょうか。よろしいですか。

私のほうも見させていただきましたが、２社を比べますと、まず、楽器ですので、演奏することの楽しさとか、そういったところを感じてほしいなと思いました。そのためには、演奏の方法が具体的でわかりやすいものがいいかなというのがベースにあります。

２社を見させていただきましたが、教育出版のほうは、篠笛とか三味線、太鼓、そういったところの記載が充実しているなと思いました。

片や教育芸術社のほうは、リコーダーに関するものとかギターに関する演奏の解説が非常にわかりやすいなと思いました。今後、実際楽器を趣味として続けるためには、リコーダーとかギターとか、現代的な楽器の演奏方法が詳しいほうがいいのかなと感じて、私としては教育芸術社のほうが、２社を比べるといいのかなと感じました。

先ほど清水委員のほうも、５つがバランスよくということで教育芸術社ということがございましたので、ほかにないようであれば教育芸術社ということでよろしいでしょうか。

続きまして、美術、お願いいたします。

○教育指導課長　美術でございます。審議会においては、やはり作品に対する興味・関心を引き出すという視点で、掲載されている作品等について、また今日的なところで、ピクトグラムであると

か、アニメーションの取り扱いについて、ご意見をいただいております。

以上になります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○坪井委員　私は光村図書の教科書がいいなと思いました。それぞれの項目ごとにキャッチコピー、テーマが書いてあるんですが、同じような言葉なんだけれども、例えば、見えないものをあらわす、材料が命を吹き込む、「どれで描く」、「どれを塗る」みたいな、子どもが自分でやってみようと思うような、誘い込むようなテーマ設定になっていて、美術はこういう形でやったら子どもたちは楽しいだろうなというキャッチコピーがそこから始まっていたということです。

それから、３年生ぐらいになっていくと、何のために美術を使うかというところのキャッチコピーが、「心安らぐ場をつくる」とか「地域の魅力を伝える」みたいな、美術が生活の中でどういうふうにつながっているかということがよくわかるテーマ設定になっていました。生活の中での美術、あるいは世界や歴史の中での美術という意味で、「絵巻物と漫画」とか、「北斎からゴッホへ」とか、そういう捉え方で書いてある。しかも見開きの使い方がすごくおもしろい。「絵巻物と漫画」、「北斎からゴッホ」みたいなのがつながっていく編集の仕方がされていて、すごくおもしろいなと思った。風神雷神の写真がバッと真ん中に出てきたりする。見開きの使い方がすごく上手だなと。見開きの使い方は日本文教出版もおもしろいと思いました。使い方がすごくうまいなと思いましたけど、そういう意味で光村図書を推薦したいと思います。

○清水委員　今、坪井委員がおっしゃったように、何か引き込まれるような感じというか、美術を楽しんでもらいたいというところがありますので、教科書をあけて、わくわくするような感じがあるというところから、光村図書がよろしいのではないかなと思いました。

○加藤教育長　私のほうも、３社を見ると、開隆堂出版と光村図書がいいかなと思いました。その中で、光村図書のほうは、今までお話しいただいた部分と、生徒による作品の制作過程が詳細に掲載されていて、実際に美術で作品をつくるときの参考になるのかなというのも感じたところです。

光村図書ということでよろしいでしょうか。

続きまして、保健体育をお願いいたします。

○教育指導課長　保健体育でございます。審議会では、全体的な見やすさという視点、それから色使いであるとか、図の明るさ、それから専門的な用語が出てきますので、漢字の振り仮名の扱いなどが話題になっておりました。

また、オリンピック・パラリンピックと教育との関連であるとか、感染症の扱いなど。また、実

際の日常生活の学習場面で、指導時期と学習内容、教科書で取り上げる順番といったところの関係が話題となっておりました。

以上でございます。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○田嶋委員　中学生年代の保健体育の授業は、僕はすごく大切だと思っていて、特に心身のストレスの対応、それから性教育というところが大事だと思っています。

そういう中で、東京書籍は心身のストレスへの対応という部分で非常にうまくまとめられていたと思います。ほかの書籍についても、そのところはしっかりとまとめられていたと思います。

学研教育みらいを僕は１番に推したいんですが、インターネットとかのさまざまな間違った情報にどう対応していくかとか、性教育に対して一番ページ数をとっていたのと、若干、教育的なものじゃないようなものにも突っ込んでちゃんと対応するようなコラムを載せたりしていて、中学生にとっては、今どき、違う変な情報がバンバン入ってくる中で正しくまとめてくれてるんじゃないかと思いました。この東京書籍と学研教育みらいについては、甲乙つけがたかったんですが、一応学研教育みらいを１番にしたいと思います。

○坪井委員　私も同じような視点、子どもの心の問題と性教育のところを重点的に見ました。やはり東京書籍と学研教育みらいだなと思いました。

私はどっちを推したらいいか、甲乙つけがたいと思ったんですが、もし違うとすれば、項目ごとに、活用するとか広げるという項目があるのが東京書籍で、学研教育みらいのほうは、まとめる、深める、考える、調べるという感じになっていて、どっちかというと、東京書籍は対話をしながら探してみよう、学研教育みらいは自分で考えてみようみたいな感じにちょっと読み取れるのかということ。

あと、章立てですが、これは学校の先生がどちらから始めてもいいのだろうとは思うんですが、東京書籍が保健の章が先で、体育の章が最後になっていました。学研教育みらいのほうは体育のほうが先で、保健が後になっています。これは多分どちらを先にしてもいいようにできているんだと思いますが、ただ、４月に中学１年に入った子どもたちが見たときに、保健から入ってほしいなというのがあったので、章立てからすると東京書籍の保健から入っていくというのが、もしかしたら使いやすいのかなと思ったということがありました。

○清水委員　私も学研教育みらいと東京書籍が甲乙つけがたいのかなと思っています。

東京書籍のほうは、交通事故とか自然災害などが頻発する時期に合わせて、それに関する指導と

して、指導順を指導要領とあえて変えて、より実践的な教育になっているというところからすると、東京書籍のほうが１番で、学研を２番にしたいと思います。

○小川委員　私も、東京書籍と学研教育みらいがいいなと思っております。先ほど田嶋委員のほうから性教育のところが充実しているのが学研教育みらいだというご意見を述べられていましたが、実は私も同じで、学研教育みらいは、かなりに丁寧に図とかを使って書かれているなという印象を受けました。

どちらか甲乙つけがたいです。見やすさとか、説明のわかりやすさは学研教育みらいかなとちょっと思っておりますが、いずれも甲乙つけがたいとも思っております。

○加藤教育長　私の意見を言う前に、今のお話をまとめさせていただきますと、清水委員と坪井委員は東京書籍が１番で、学研教育みらいが清水委員は２番。田嶋委員は学研教育みらいが１番、小川委員も１番ということですね。東京書籍と学研教育みらいについては、それぞれ１番の方が２人いるということになります。

私のほうの意見ですが、先ほど教育指導課長のほうから話があったように、実際に現場の教員がこの教科書を研究した中で、指導の順番という話がありました。学習指導要領の順番どおりに扱っている教科書が多いんですが、東京書籍については、あえてそこのところの順番を変えているところがあります。順番を変えているのには、自然災害とか、そういったものが多くなる時期の前に指導ができるようにという配慮があるのかな、一定の意味があるのかなと感じました。現場もそういったところを捉えての意見だと思います。

私が見た中では、発展のページの中に熱中症の予防と手当という記載がありました。これが東京書籍は具体的でわかりやすい説明がされているなと感じました。ほかの会社も、今、熱中症が話題になっていますので、見比べさせていただいたんですが、より具体的でわかりやすいと私は感じました。

そういったことで私は東京書籍のほうがいいのかなと。保健体育の前提としては、実際に生活に役立つような教科という視点が大事かなと考えると、その時期に合わせた題材を取り上げているというところでは若干東京書籍のほうがいいのかなと感じましたが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。――では、甲乙つけがたいところですけれども、東京書籍ということで決定させていただきます。

続きまして、技術・家庭（技術分野）をお願いします。

○教育指導課長　技術・家庭（技術分野）でございます。審議会では、工具の使い方であるとか、

安全面への配慮といったところが話題になっておりました。また、プログラミングの取り扱いなどについても、ご意見をいただいたところです。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、いかがでしょうか。

○小川委員　どれもとても丁寧にまとめられていたので、どれも楽しい本だなと思って、実を言うと拝見させていただいています。

特に情報の取り扱いが、中学は実は技術がメインになりまして、高校から教科が始まるんですが、１年生からプログラミング教育が始まっているという意味では、技術の中でどういうふうに情報の教育が展開されるのかということは結構大事かなと思っておりまして、その辺を重点的に見させていただきました。

印象としては、東京書籍と開隆堂出版がよいと思いました。とても丁寧にまとめられておりまして、本当に甲乙つけがたいなと思っています。

開隆堂出版のほうは、特に情報のところは、高校の教科の情報ぐらい踏み込んだ形で詳細に書かれていまして、すごいなと思いました。一方で、初めてコンピューターの仕組みを勉強するのに、ここまでだと詰め込み過ぎかなという心配をちょっと持っております。

東京書籍のほうは、あんばいよく原理からいろいろきれいにまとまっている感じで、特にいいなと思ったのは、プログラムの例がとても身近なものでいて複雑過ぎずシンプルで、アルゴリズムというプログラムのフローを考えるのにもいい例を取り上げているなと思いました。

東京書籍は技術の工夫、開隆堂出版は豆知識といって各ページに今学んでいるものが生活の中でどういうふうにつながっているのか、どういうところに生かされるのかみたいなことの記載がされていて、両方ともとてもいいなと思っておりますので、この２社。懸念事項は開隆堂出版がちょっと難しいかなというのはありますが、内容としてはとてもすばらしいと思っています。

○加藤教育長　２社とも、推しということでいいですか。

○小川委員　どっちかといったほうがいいですかね。内容としては両方ともいいと思っていますけれども、中学生という意味からしたときに、東京書籍のほうが無理なくできるかなという印象です。

○清水委員　私も迷っていましたが、今の小川委員のお話を聞いて、やはり東京書籍がいいのではないかなと思いました。

○坪井委員　私もどちらにしようかなと思っていましたが、自分で読んだ限りでは、開隆堂出版の本のほうが子どもたちにとっておもしろいという感じを持たせるんじゃないかなというふうに思い

ました。東京書籍は非常に詳しく情報が整理されているんですが、ある意味、知識中心に整理され過ぎていて、もしかしたら、ちょっとおもしろくないんじゃないかなと思ったんです。それは門外漢が思ったことですが、そういう意味では、私は開隆堂出版と思っているところです。

○加藤教育長　私は、技術・家庭の技術ということで、実生活に活用できるというところが１つの視点としてあるのかなと思いました。私は、東京書籍と開隆堂出版がいいのかなと思いました。

委員の方が言われたように、ちょっと切り口が違うので、どっちにしようかなと考えたんですが、実生活という部分では、全体的に東京書籍のほうが記載が詳細で、例えば実習の手順とか、そういったものが写真とか図でわかりやすく示されていて、実技を行っていく部分では参考としやすいのかなというのは感じました。

冒頭のところで技術分野のガイダンスというのがあって、この部分が充実していて、これからの学習について目的を持って学習できる。読んでおもしろいという視点とは別に、実際それを使って授業をやるという視点では、若干、東京書籍のほうがいいのかなと感じたところです。

今のお話ですと、清水委員と小川委員は東京書籍、坪井委員のほうは開隆堂出版ということです。私も東京書籍なんですが、東京書籍ということでよろしいですか。

続きまして、技術・家庭の家庭分野をお願いいたします。

○教育指導課長　家庭分野でございます。審議会では、食品の栄養素、消費者教育の取り扱い、ミシンや調理など実習に関する写真の見やすさなどについて、ご意見が出ておりました。

簡単ですけれども、以上でございます。

○加藤教育長　ご意見、お願いします。

○坪井委員　これはもう開隆堂出版です。一押しです。というのは、まず自立と共生というのがテーマになっています。教科書はいずれも自立と共生というのがテーマとして出ているんですが、それから始まって、開隆堂出版は家庭生活というところから入っています。衣食住、そして消費生活、環境、課題となっていくんです。家庭生活というのが今とても大事なことで、１年生に入って家庭科を学ぶに当たって、もちろん共生と自立ってどういうことか、今の自分の家族に鑑みて考えていく、ぜひともそこから始まってほしいなというのがありました。そして、開隆堂出版は、家庭生活も衣食住も消費生活も各章ごとに、常にＳＤＧｓにつながっていくんです。その視点は、ほかの科目でもそうですけれども、非常に明確です。

それから、これも私の分野から言いますと、虐待という言葉を使っていません。ただ、子どもたちが家庭の中で苦しんだときの相談窓口が、ＮＰＯであったり、児童相談所であったりということ

が書いてある。あるいは里親とか児童養護施設で暮らす子どもたちのことがきちんと触れられていました。巻末には、子ども家庭支援センターまで出てくる。東京書籍のほうにもファミリーサポートとか出てくるんですけれども、家族などで苦しむ子どもたちのために、その子たちが直接ＳＯＳを出せるところまで配慮したつくりになっていまして、こういう形で家庭科でやってもらえたらというのをすごく感じたので、これは一押しです。

○小川委員　私も開隆堂出版いいなと思いました。開隆堂出版が一番いいなと思ったのは、日常生活、家族との関係とか衣食住の中にも持続可能な社会の課題があって、それがＳＤＧｓと関係がある。それを意識づけしてやっていくことがすごく大事だということが、いい刺激になるのではないかなと思いまして、開隆堂出版がいいなと思いました。

東京書籍も、見た感じも、色合いとかすごくよくて、バランスがいいし、調理をするときの衛生面といったことに関しては、すごく見やすくきれいにまとまっているという点ではいいかなと思ったんですが、家族とか衣食住とか、ただ技能的なことだけではなくて、そこから自分たちのつくっていく将来の世界とか社会を見ていってほしいという思いがあったので、開隆堂出版がいいかなと思いました。

○清水委員　私は東京書籍を１番にしたいと思います。理由は小学校とのつながりをある程度明確にして教えているということ。また、写真とか図の配置が実習の手順として視覚的に非常にわかりやすくなっていると、先ほどもちょっと話があったと思いますが、この辺のところで東京書籍を 1 番に推したいと思います。

○田嶋委員　私自身、東京書籍と開隆堂出版。教育図書についても、非常に魅力的な教科書だと思いますけれども、坪井委員の非常に強いご意見と小川委員の意見も含めると開隆堂出版というのは非常にいいものだと改めて今思いました。ですから、開隆堂出版を１番にしたいと思います。

○加藤教育長　私の意見としては、東京書籍がいいかなというのは最初思ったところです。その理由としては、先ほどもお話ししましたけれども、家庭科ということで実際の実習とか写真が、ほかと比べてわかりやすい、実習の参考として使いやすいというところが見てとれるのかなというところがありました。ここはほかとの比較の中で東京書籍がいいなと思ったところです。

ただ、開隆堂出版のほうは、そういった実習面ではなくて、もうちょっと大きな捉えの中で家庭というものを捉えているというところで、開隆堂出版のほうもいいのかなと思いました。

今のお話を総合的にまとめますと、開隆堂出版ということでよろしいでしょうか。――それでは開隆堂出版のほうにさせていただきます。

続きまして、外国語の英語をお願いします。

○教育指導課長　外国語、英語でございます。審議会では、スピーキングについて各教科書の取り扱いの基準について話題が出ておりました。

関連してストーリーリテリング、学習した内容を絵などを見ながら友達に説明するような活動ということですが、そうしたものの取り扱いについても、話題となっておりました。

生徒の興味を引く構成の工夫であるとか、取り扱っている単語の数、情報量が充実しているかどうかといった点についても、ご意見をいただいております。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、お願いいたします。

○田嶋委員　小学校から英語を始める教育になってきています。中学校の英語は本当に用意ドンで一列に並んでスタートできるものじゃないような気がしています。そういう意味で、最初のスタートラインが難しいなと思いながらいろいろ見ていました。

光村図書に関しては、話す（スピーキング）を伸ばすということをかなりすぐれた形で教科書にまとめてくださっているという印象を受けました。もちろん文法やそういうものをしっかりと身につけるのは大事なことではありますが、今、日本人に一番足りないところとか考えて、教育指導要領の中で重点的に置かれていると思います。そういう意味では、この光村図書が私は一番いいと思いました。

○坪井委員　私は光村図書と東京書籍と開隆堂出版の３冊をあっち行ったりこっち行ったりしながら見ていました。最終的には光村図書なのかなと思っています。

どれもすごく工夫されていて、中学生の子どもたちが自分たちの生活に即して使えるように学ぼうということで目指しているのがよくわかりました。その中であえて言うと、光村図書の選択しているシチュエーションが、中学校１年生がクラブの選択とか、家庭行事、授業の中での職業体験授業をやるときとか、中学生活に密接な部分でつくっているので、子どもたちとしてみたら、おもしろいんじゃないかなと思ったんです。その意味で、自分たちのシチュエーションの中で使える英語ということを目指しているという意味で一歩、点数を高くしようかなということです。

あとは、単元ごとのゴール、どの教科書もそれぞれ使っていましたけれども、ゴールをどこにするか、単元の初めに出てきますが、そこは光村図書の場合とてもわかりやすく示されていたなと思ったので、光村図書を１位にしようと思います。

○小川委員　私は、光村図書もいいと思っていたんですけれども、東京書籍もいいなと思っていま

す。

取り上げている教材がかなり興味深くて、中学３年生ぐらいになってくると、英語が使えると本当にこんなに世界が広がるのかということを見させてくれるような教材がたくさん入っていたので、東京書籍がいいんじゃないかなと思っています。選挙のこととか、グラフとか、プレゼンのときに使うようなことだったり、日常生活からちょっとステップアップしたような内容も中学３年生ぐらいだと展開されているというところがおもしろいなと。スティーブ・ジョブズの話が出てきたり、結構興味深いなと思っております。

あと、小学校が東京書籍を使っているというのもあって、今ちょうどコロナの状態で接続のところが一番不安定になっているという意味でも、似たようなテーストのもののほうが、先ほどの田嶋委員のお話のように、一斉にスタートがすごく難しい教科なだけに、そういうなじみのある形を選択するのも悪くないのかなと思いました。

○清水委員　私も東京書籍のほうは、小学校からのつながりを考えると、小川委員が言ったようにいいと思いました。

ただ、一番大切なのは、やはり話せるようになること、コミュニケーションだと思いますので、この点を重視すると、巻末のストーリーリテリングがそういった役目を果たすと思いますので、それを考えると光村図書が１番ということになるかと思います。

以上です。

○加藤教育長　私も見させていただきまして、英語自体は最終的には４技能をバランスよく育てるということが大事だと思いますが、４技能の中でも、初めに聞くことができるというところがその後の話すこと、読むこと、書くことにつながるのかなという視点で見させていただきました。先ほど、光村図書のスピーキングの部分で評価がありましたけれども、聞くところの教材の数も比較的多い。そういった意味でも光村図書がいいのかなと感じたところです。

それと、最初の説明の中で使われている単語の数の話がありました。中学校では、1600 から 1800 語ぐらい学習しますが、実際、光村さんのほうでは、多分 2000 語ちょっとの語数が入っていると思います。小学校で学習した 600 から 700 ぐらいの語数が繰り返しそこの中に取り込まれて、2000 幾つという形で語数も豊富に扱っている。東京書籍は、先ほどお話がありましたように、小学校からの接合という意味でも、同じ教科書であるということ。光村のほうでは、小学校で使っている教科書ではないですけれども、小学校で出る単語についても、繰り返し使えるということで、小学校からの接合という部分でも、私は光村図書のほうでも一定程度そこは問題ないのかなと思いました。

皆さんのお話ですと、清水委員と田嶋委員と坪井委員が光村図書、小川委員が東京書籍ということで、私も光村図書がいいと思いますので、光村図書ということでよろしいでしょうか。

それでは、最後に、特別の教科道徳、教育指導課長、お願いします。

○教育指導課長　道徳でございます。審議会では、生徒の実態に合わせて、どのように教科書を活用するか。また、授業の振り返りなどの扱いが話題になりました。今回、別冊については、便利であるという意見も審議会ではございました。

また、取り上げられている人物によっては、生徒が関心を持てるのではないかという意見もございました。

以上となります。

○加藤教育長　ご意見、お願いいたします。

○坪井委員　本当に悩んでいます。これと言えるのがなくて、悩みます。１つには、題材に何を使っているかということと、もう一つ、すごく気になっているのが、それぞれの教科書が、子どもに振り返りをして、何が理解できたかということを自己採点させるページをどの教科書も大体つけている。

日本文教出版はノートが別冊になっていて、そこに自分が考えたことや友達と話し合ったことを書くようになっていて、各ページの下に印象に残ったこととかいうようなことを、何段階かに毎回○をつけるようになっている。ほかの教科書でも、「きょうの学習の内容は印象に残った」から「残らなかった」まで。友達の話し合いから「新しい発見や気づきがあったか」、「なかったか」、「自分の考えを深めることができたか」、「できなかったか」、「これから大切にしたいことがわかったか」、「わからなかったか」。そこを５段階評価みたいにして○をつけるんですね。

子どもが本当に自分自身の学びを振り返り、あるいは先生が、自分がした授業について子どもがどれだけ受けとめたかということを知るための材料として、毎時間書くということになっているのかもしれないんですが、道徳の評価ということとどこかでつながりはしないかというのが心配なわけです。子どもたちが本当にここで書くだろうか。それは、全部「あった」とか、「できた」というところに○をしておくほうがいいという感じで、表面的なところにとらわれて書いてしまうのではないか。先生たちも、それは関係ないと言いながら、やっぱり最後評価するときに見てしまうのではないか。これがもし先生のために必要なんだとしたら、ほかの教科も全て先生の話の内容がわかったかわからないか全部アンケートをどうしてとらないんだろう。どうして道徳だけとるんだろうみたいなところで、これだけじゃないです、ほかの教科書もみんなそういう部分があった。中には

Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄに○をつけなさいというのもありました。そこをすごく悩みました。

その中で、教育出版の教科書も、最後のページにはついているんですけれども、毎回ではなくて、学期ごとに一度みたいな形です。そこで書く評価の内容が、「道徳授業を受けての感想を教えてください」で、「満足」、「まあ満足」、「あまり満足してない」、「満足してない」というだけなんです。ここは先生からの話で満足したかどうかを聞くだけなのかもしれないなと思ったりします。そこを評価してもしようがないかもしれないですけど、道徳が評価につながるんじゃないか、そこのところから考えて、まだましな教育出版の教科書はどうかなと思ったんです。

そういう視点から、教育出版の教科書の各単元には、表題のところに、何を学ぶかというのを特にバンと明記はしない。下に何だろうかという問題提起をするような形になっていますが、そのテーマに何々について考えるみたいなところがないということ。最後の問題設定も、ある程度、道しるべという形で考えましょう程度になっているという意味で押しつけがましさはないのかということもありました。

それで教育出版となったんですが、その教育出版の中でも、全部きちんと読んだわけじゃないんですが、前々からちょっと指摘されている２年生の中に「たすきとポンポン」という男女の役割分担について考えさせる部分があります。これ自体が、役割分担はどうだろうかと考える問題設定にはなっているんですが、最後のほうに、「女子ならではのチアリーダーも捨てがたい」、そういう表現がある。そこは「女子ならではのチアリーダー」では、今はないから。男子もチアリーダーはいるし。ちょっと古いからこうなっているのか。男女の役割分担を考えるのに、女子ならではのチアリーダー。女子だって団長をやってもいいんじゃないかという中身になっているんですけど、ちょっと気になるところがないかと言えばそういうわけでもない。すごく悩んでます。でも、今みたいに評価とつながらないという意味では教育出版というのを１つ上げたいと思います。

○田嶋委員　既に坪井委員がおっしゃったんですが、ノートに対する評価が全ての教科書の評価というふうになると、難しい問題があると思います。全ての教科書にそういう評価のノートが少なからずついているわけで、自分自身としては、例えば何を学ぶか、最初に言ってしまうことがいいか悪いかという議論はあると思いますが、道徳って、教えるのにすごく難しそうな気がします。ある程度、これについてという焦点を絞りながら教えていくということは、僕は、生徒にとっても、教員にとってもいいんじゃないかなと思って、そういう意味では僕は日本文教出版。

先生が一番懸念されて最後のノートが評価につながるんじゃないかとおっしゃられたところは、僕は全く逆なことを思っています。確かにほかの教科もやったほうがいいぐらいかもしれませんが、

その子どもがこれに気づいたとか、そう思ったということをそこに簡単に記載する、これを評価につなげなければいいわけですよね。それは教員の問題だと僕は思うし、子どももそれを素直に書くことが本当の意味での道徳を身につけることにつながるものになっていくんじゃないかと僕自身は逆のほうを思いました。

ですから、僕は日本文教出版でいいというふうに思いまして、１番に上げます。

○小川委員　道徳の評価の仕方がとても難しいので、こちらで提供する、決めた教材の中に評価という部分が入っていたりすると、そういう評価を学校に求めているような印象を与えるのはすごく怖いなというふうに感じています。

道徳はいろいろな人の考え方があって、そこで自分と違う考え方を受け入れるということも大事だし、自分の考えを主張することも大事な時間だと思うので、そういう意味で、各教科書の評価に何がしか入っていることがあって、評価だけで決めるというのもなかなか難しいと感じているところです。どれに決まるとしても、評価の場所についてはかなり慎重に取り扱ってほしいという思いがまずあります。

その中で、私自身が、内容として取り上げる題材とか、題材の見せ方みたいなところで一番いいかなと思ったのが、学研教育みらいです。いろんな道徳の教科書でも出てくるんですが、１つの教材で、例えば、「バスと赤ちゃん」というのがあります。普通は、「バスと赤ちゃん」は日本の「バスと赤ちゃん」だけしか出てこなくて、それについてどう考えようかという話題提供になりますが、それに付随して、日本の「バスと赤ちゃん」の話題と、アメリカの「バスと赤ちゃん」の話題が出てくる。１個の考えたい単元なんだけれども、既に提示されている資料が多角的になっているという点は、議論が進むとてもいい材料になるんじゃないかなと思いまして、学研教育みらいも最後に、理解が深まったとか、評価が普通に入っているんですが、あくまでも、教材をどういうふうに提供して、その材料を使ってどうやって話を展開していこうかと思うときの材料としては、多角的な捉え方ができる提供のされ方をしているなという印象を受けましたので、学研教育みらいがよいのではないかと思いました。

○坪井委員　評価の部分を除外して、私も学研教育みらいを、今おっしゃったのと同じように、中身としては非常におもしろいなと思いましたので、それはつけ加えておきます。

○清水委員　いろいろ今決めかねているところですけれども、１ついじめということに関して見た場合に、日本文教出版は、いじめと向き合う教材がビビッドな形で構成されていたりして、コミュニケーションのあり方について多少考えられる内容だったのではないかなということが１つありま

した。

あと、先ほどの道徳ノートの別冊の件です。これは発問が記載されてないということで、いろんな考え方が展開できるということ。これは生徒が学習していく上においてもみずからの振り返りにも非常に活用できて、大切なところではないかというところも上げられるのではないかかなと思います。

現行は教育出版で、これもいろいろ議論して教育出版になったんだと思いますが、教育出版も、坪井委員がおっしゃるように、確かにいいところはあるのかなと思いました。あと、小川委員の学研教育みらいの内容的にというところですが、私としては、田嶋先生と意見が同じだと思いますが、日本文教出版にしたいと思います。

○加藤教育長　これもご意見をまとめますと、小川委員は学研教育みらいがいいと。田嶋委員は日本文教出版、清水委員も日本文教出版、坪井委員は教育出版が、ほかもいいんですけれども、その中ではそれがいいというご意見だと思います。

私のほうも、全体を見させていただいて、非常に難しかったです。各社いろいろ工夫もされているので、どれがいいかなということは悩みました。今のご意見の中で、評価の部分のご意見がありました。日本文教出版の別冊ノートの下のところに、自分への振り返り、○をつけようというところ、そこで考えることができた、できなかった、それが評価につながるんじゃないかというお話がございました。私も、これを見たときに、これの取り扱いはどういう形なのかなと考えました。

ほかの会社でも同じようなものがありますけれども、特にこれは各ページに教材ごとにこういったものがありますので、どうなのかなというところはありましたが、実際、後ろのところに別冊の取り扱いについて出版社のほうから、「先生・保護者の方へ」という注書きがありまして、「道徳ノートは道徳の時間に思ったことや考えたことを書きとめるものです。1 時間ごとの思考の変化を継続的に記録することで学習がより深まることを期待するものです。成長の過程を捉えていただくことを願っています」と書いてあります。子どもには書かせるという形にはなると思いますが、多分それを教員が見て、子どもの成長を捉えて次の授業なりで、どういった成長をさらに促していくのかといった材料で使おうということで、これは出されているのかなと私は捉えました。評価ということではなくて、先生自身が次の授業に生かして、子どもの成長を確認してみるものかなと捉えると、特にこれが問題とは思わなかったです。

ただ、実際に授業で先生が使うときに、これを簡単に評価につなげてしまうようなことがあれば問題ですけど、それは先生の指導の問題なので、教育委員会のほうでも、道徳については、どうい

った評価をする、文章表現でこういった評価をするとか、そういったところも研修なりでやっていますので、そういった中で話すことで、一定懸案はありましたけれども、ここの部分はクリアできるのかなと思いました。

そうなると、実際の教材の内容が重要なのかなと思いました。小川委員のほうでも、学研教育みらいについては教材の内容が非常にいいというご意見もありました。清水委員のほうからも、日本文教出版のいじめというところがいいんじゃないかという話もありました。私も、子どもに教える前提として、教材を読んで子どもがそれを考えるという形になりますので、教材の中身に何を選ぶのかというのは非常に重要かと考えています。

そうしますと、各社バランスをとりながらいろいろな教材を扱っていますが、比較をすると、例えば日本文教出版であれば、情報モラルの関係の教材が若干多いのかなと感じました。今実際、ＳＮＳによるいじめとか人権侵害、情報の取り扱いを取り巻くようなことで、非常に多くの問題が表出している中で、そういったものを題材にしながら考えるということは非常に意味があるのかなと思っています。

いじめはいけないと言うだけではなくて、いろんな機会を捉えて子ども自身がそういったものに向き合う、考える、そういった機会にするためには、そういった情報モラルに関する教材が比較的多い日本文教出版については教材的な部分ではいいのかなと感じたところです。

最終的には、今の段階で甲乙つけがたいけど、日本文教出版を２人の方がいいと、評価の部分も整理した上でいいというお話をいただいていますので、日本文教出版ということでよろしいでしょうか。

○坪井委員　選定自体はそれで私も構わないと思います。ただ、指導課のほうでということなるんだと思いますけれども、先生方に道徳の教科書について、教育委員会でこれだけ評価につながらないようにということが懸念されたのだということ、問題性があったということ。そして、道徳の評価は今までも研修されていたということですが、いま一度、これが直接評価につながらないように、そして、子どもたちが評価を気にして書けないようなことにならないように。結局は、教科の先生と子どもの信頼関係の問題だと思います。本当のことを書いてもこの先生は大丈夫だと思うか、書けばこの先生は表面だけしか見ないと思うかというところになってきちゃうと思いますが、本当に子どもが書けるような関係を結ばないとだめなんだよというそのあたりの指導をどうぞくれぐれもよろしくお願いしたいと思います。

○教育指導課長　きょういただいたご意見はきちっと現場のほうにもお伝えして、道徳が教科化に

なって、評価についてはまだまださらに精度を高めていく必要があると思いますので、これからも各学校で研修をしていただくようにお話をしたいと思います。ありがとうございました。

○加藤教育長　道徳の評価自体は文章で評価するという形になるんですよね。

○教育指導課長　ご指摘のとおり、５、４、３、２、１とかＡ、Ｂ、Ｃということではなくて、文章で評価しますし、何々ができましたとか、そういうような表現にはならないということになっています。

○加藤教育長　今、坪井委員からいただいたご意見を十分に踏まえて、評価のほうも、子どもの成長につながるような文章で、現状はこうでこういうところがよかったよ、次の成長にこうやったらつながるといった次につながるような評価ができるように教育委員会としても考えていきたいと思います。ありがとうございます。

ほか、よろしいでしょうか。

それでは、採択された教科書について確認をしたいと思います。

まず、国語は光村図書。国語の書写は同じく光村図書。社会の地理的分野は帝国書院。社会の歴史的分野も帝国書院。社会の公民分野は教育出版。社会の地図は帝国書院。数学は東京書籍。理科は啓林館。音楽（一般）は教育芸術社。音楽（器楽）についても教育芸術社。美術が光村図書。保健体育が東京書籍。技術・家庭の技術分野が東京書籍。家庭分野が開隆堂出版。外国語、英語が光村図書。特別の教科道徳が日本文教出版ということでよろしいでしょうか。

傍聴の方もいますので、もう一回読み上げさせていただきます。国語が光村図書。国語の書写が光村図書。社会の地理的分野が帝国書院。歴史的分野が帝国書院。公民分野が教育出版。地図が帝国書院。数学が東京書籍。理科が啓林館。音楽（一般）が東京芸術社。音楽（器楽）が教育芸術社。美術が光村図書。保健体育が東京書籍。技術・家庭の技術分野が東京書籍。家庭分野が開隆堂出版。外国語、英語が光村図書。特別の教科道徳が日本文教出版。

以上になります。

第４９号議案　令和３年度使用特別支援学級教科用図書採択について

○加藤教育長　続きまして、第 49 号議案「令和３年度使用特別支援学級教科用図書採択について」。この件について、説明をお願いいたします。

○教育推進部長　それでは、第 49 号議案、令和３年度使用特別支援学級教科用図書採択について、提案理由をご説明いたします。

本案は、特別支援学級で学ぶ児童・生徒が使用する教科用図書の採択に関する件でございます。

特別支援学級では、特別の教育課程を編成している場合があります。したがいまして、学校教育法附則第９条及び同法施行規則第 131 条の２の規定に基づいて、一人一人の児童・生徒の実態に応じて、教科によって当該学年の教科用図書を使用することが適当でない場合には、他の適切な教科用図書を使用することができることになっております。

議案資料は、特別支援学級設置校の校長より令和３年度に使用する教科用図書として申請の出されたものの一覧です。

特別支援学級で使用する教科用図書は３種類に大別されます。

１つ目は、文部科学大臣の検定済の教科用図書です。これを使用する場合、学校は通常の学級で使用されているものと同じものを使用します。

ただし、学年の実態に応じて当該学年より下学年の教科用図書を使用することもございます。

２点目は、知的障害の特別支援学校で学ぶ児童・生徒が使用する文部科学省著作の教科書です。

３点目は、いわゆる附則９条図書と呼ばれる一般図書です。この附則９条図書については、東京都教育委員会が特別支援教育教科書調査研究資料を作成しておりますので、これを参考にしまして、児童生徒の障害の程度、能力等にふさわしい内容であるかどうかを各学校が検討し、選定をいたしております。

ご覧いただいております議案資料につきましては、児童・生徒の障害の程度、能力等にふさわしい内容の附則９条図書を中心として使用する学校や、通常の学級との交流及び共同学習の推進等を配慮し、通常の学級で使用している文部科学省の検定済の教科用図書の図や写真を使用して教員が特別支援学級用に編集し教材化する学校など、各小・中学校が特別支援学級の実態や個に応じた特色化を図りながら教科用図書の選定を行っております。

本案につきましては、このように各学校が一人一人の児童生徒に合った適切な教科用図書を調査・研究の上、申請をし、教育委員会が採択を決定する手続になっております。

本日の議案資料の一覧に基づきまして、文京区立の小・中学校特別支援学級の児童・生徒が令和３年度に使用します教科用図書をご決定くださいますようよろしくお願いいたします。

以上です。

○加藤教育長　ただいまの説明につきまして、ご意見、ご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、お諮りしたいと思います。

ただいまの件につきまして、提案理由のとおり、お認めしてよろしいでしょうか。

（異議なし）

○加藤教育長　それでは、そのように決定させていただきます。

以上で本日ご用意した案件は全てでございます。

第３　その他の事項

○加藤教育長　その他の事項で、その他、何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、これをもちまして第８回定例会を終了させていただきます。本日はありがとうございました。

（15：57）

令和２年８月 25 日

議事録署名人

教育長

委員